石井　私は理解といふものは非常に重大なことだと思ふんです。今までは理解したものを表現できないと、理解したやうに思はれないんです。ところが理解と表現といふものは異質なものであって、しかもその理解といふものを通して、簡単な理解から深い理解へと進んでいって、その上で表現に導かれなければならないと思ふんです。

鈴木　さういふことですね。それを人間形成と言ひますか能力形成と言ひますか、その内なる力をいかに高くもつかといふことで、あとは表現能力といふことになりますね。例へば、漢字をそんなに小さい時から教へて何になるかといふ問題にしても、例へば大根を食べさせた、その大根が何になるか、それは頬(ほほ)の左側の肉が多くなってそこがふくれる、といった結果が出ないと承知(しょうち)しないといふ事と同じですね。大根を食べれば体全体にいきわたって栄養となり、どこがどう育ったかといふことでなしに、成長の土台となるんですね。

私の場合でも、ヴァイオリンで育てるといふことです。毎日訓練したその結果が、やがて学校の成績にも表れるんですね。その能力を養ふといふことです。

石井先生の、漢字をやらせて忘れてしまってもよろしいとおっしやった言葉が、大きな意味をもってゐると思ひました。

石井　大阪のある幼稚園では、私のかうした主旨(しゅし)をよく理解しまして、園長が、初めから父母を招集(せうしゅう)してかう申したさうです。

「私は漢字教育をいたします。けれどもそれは知識を貯(たくは)へるためではございません。幼児の頭の働きをよくするためですから、この幼稚園を卒業する時には全部忘れさせてもらふやうにするつもりです」と言って始めた幼稚園があるんです。私はこれを聞きまして、父兄(ふけい)たちはどんな気持でこれを聞いてくれたかと思ひましたね。

鈴木　石井先生が出られた、先日の NHK テレビ“こんにちは奥さん”ですか、あれの新聞評論を読んだのですが、漢字を早く教へては困る、小学校に入ってから教へることを、子供たちがもう知ってゐたんではやりにくいと書いてゐましたね。

これは 25、6 年も前のことですが、小学校の校長先生が、入学前の父兄を集めて教育についてお話をしたことがあるのです。私もその中で一緒(しょ)に聞いてゐたんですが、その時、「学校に入る前に、子供に何も教へないで白紙で入れていただきたい。さうすれば我々は一緒に教育が出来るので、家庭は特別ないらんことをやってもらっては困る」といふ話でしたね。その時、私は白紙といふ言葉が、

“白痴(はくち)”に聞えましてね。「白痴で全部揃(そろ)へて小学校の一年生から教育する」といふのが目標なのかと思ひましたよ。

漢字の読める子供がゐたのでは、小学校の教育に非常にさしさはりがあるといふ考へなのですね。

石井　今も昔も全く変ってゐませんね。教育といふものは、先生のためにあるのではなくて、子供たちのためにあるんですからね、先生の都合(つがふ)のよいやうにやられたんでは困るんですね。

子供がどこまで育ったか、その育ち方を見、それを継続していくといふことがなかったら、それ以前の教育といふものは全く無意味になってしまひますね。

鈴木　就学前に、いろんなことを学んだ子供と、何も学ばないで入学した子供が一緒(しょ)に教育されると、何も学ぼないで来た子は、学校の側からみれば一所懸命やるが、学んできた子は無関心になって先生の話もよく聞かない、とよく言はれますが、それは逆ですね。

石井　全く逆だと思ひます。むしろ、さういった知識がある程度多い子供の方が、一所懸命になって喜んでやりますね。

文字の教育に関する限り、私は小学校一年生を何回も持ちましたし、さういふ子供たちの実際を見てゐますが、例へば文字を書かせるといふ点にしても、一所懸命に、夢中になって書いてゐる子は、やはり一番出来る子供ですね。字を一番上手に書く子供です。

上手に書く子供ほど書くといふ喜びを一番よく知ってゐますね。ですから一番熱心になるのですね。そして一字書いては溜息(ためいき)をついて、また一字書いては後ろの子供をつついてみたりする子は、、一番下手な子ですね。

鈴木　つまり集中能力が育ってゐないわけ。

石井　さうですね。ですから私はよく出来る子供ほど扱ひにくいといふのは、先生が本当に正しく子供を見てゐるか知らんとまづ思ひますね。確かに“出来る”といふことを鼻にかける子もゐますが、どちらかといふと出来る子供ほど真剣にやりますね。

鈴木　子供の一番基本的な問題は、出来るといふことの中に喜びがあるわけですね。出来るものをもっと立派に、といふことが能力を育てていく上で大事なポイントになるわけです。

石井　出来るやうになったからといって、自惚(うぬぼ)れてそれをもうしないといふことは、子供の世界にはありませんね。それを伸ばしてやるといふのが教育者の務めだと思ひますね。